

令和2年度 自己評価計画書

石川県立大聖寺高等学校

1 3年間を見通した進路指導体制を一層充実させ、早期から生徒に高い志を持たせて、一人一人の進路実現を図る。

具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
① 放課後補習を効果的に 行い、大学入試に対応 できる基礎学力定着と 応用力養成を図る。	進路指導課 各教科 3年学年会	習熟別補習が定着し一定の成果が見 られる。さらに志望や適性に応じた緻 密な計画に基づく補習を展開し、生徒 全員の進路実現につなげたい。	【満足度指標(生徒)】 放課後補習は受験学習 に効果的に作用してい る。	効果的に作用していると評価する生徒の割合が A 85%以上である。 B 80%以上である。 C 75%以上である。 D 75%未満である。	C、Dが出た場合、主 管課で原因を分析 し、実施方法を再検 討する。	昨年度 「役立っている」「どちらかとい えば役立っている」の割 合が 74.4% (第2回学習実態調査)
② 個人面談を通して生徒 理解に努め、生徒個々 に応じた進路指導を実 践し、3年間を見通した 進路指導体制の充実に 資する。	進路指導課 学年会	教員と生徒との信頼に基づく面談は十 分に機能している。より進路指導に係 る知見と助言力を高め、生徒の進路選 択を支援したい。	【満足度指標(生徒)】 担任との面談が自分の 進路目標設定や進路実 現に有効である。	進路を考える上で担任との面談が参考になったと思う生徒 の割合が A 95%以上である。 B 90%以上である。 C 85%以上である。 D 85%未満である。	C、Dが出た場合、主 管課で原因を分析 し、実施方法を再検 討する。	昨年度 「担任との面談が参考にな っている」「少し参考にな っている」の割合が 1年 90.2% 2年 87.4% 3年 87.8% 平均88.4%
③ 大学合格者数の数値 目標を達成する。	進路指導課 3年学年会 教務課 各教科	授業第1主義を貫き、高い学力を持つ 生徒をさらに伸ばし、基礎学力に課題 を有する生徒には手厚い指導をより充 実させ、生徒個々の能力を最大限に引 き出す必要がある。	【成果指標】 国公立大学合格者数	国公立大学合格者数が A 60人以上である。 B 50人以上である。 C 40人以上である。 D 40人未満である。	C、Dが出た場合、主 管課で原因を分析 し、実施方法を再検 討する。	昨年度 国公立大学に45名(現役4 +浪人1)が合格した。
			【成果指標】 地元の金沢大学と難関 大学の合格者数	金沢大学及び難関大学の合格者数合計が A 15人以上である。 B 10人以上である。 C 5人以上である。 D 5人未満である。	C、Dが出た場合、主 管課で原因を分析 し、実施方法を再検 討する。	昨年度 難関大合格者は1名、金沢 大学合格者数は5名(現役 4+過年度1)

2 授業と家庭学習の相関を高め、学習内容の確実な定着を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための研究と意識高揚を進める。

① 中高交流研究授業、校 内公開授業など諸研究 授業の実践・参観及び 研究協議会やICT活用 研修会を通じて、教科 指導法等の技能を高 め、生徒の思考力の向 上に努める。	教務課 各教科	研究・公開授業の実施など各教科での 努力により比較的良好な結果が出てい る。生徒の資質や適性を把握し、授業 での工夫と改善を今後も地道に続けたい。	【満足度指標(生徒)】 授業において自ら深く考 える機会があり、学習に 対する大きな刺激となっ ている。	授業において、自ら深く考える機会があり、学習に対する 大きな刺激が得られたという生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、主 管課で原因を分析 し、実施方法を再検 討する。	昨年度 国語 82% 地公77% 数学 82% 理科80% 保体 70% 英語83% 平均 79% (生徒による授業評価)
② 家庭学習時間調査を通 じて、生徒の学習状況 を把握するとともに、学 年會と連携して各種課 題提出の徹底を図るこ とにより、家庭学習習 慣の確立に努める。	教務課 各学年会 各教科	家庭での学習時間が十分とは言えな い。生徒が自主的に学習に取り組む習 慣を育むために、各教科が具体的な指 示を与えつつ内発的な動機を促した い。	【成果指標】 1日平均の家庭学習時 間を1年生120分、2年生 120分、3年生220分とす る。	目標時間を達成している生徒の割合が A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。	C、Dが出た場合、主 管課で原因を分析 し、実施方法を再検 討する。	昨年度 1年 35% 2年54% 3年36% 平均 41% (学習時間調査)
		部活動休養日の設定による時間的な 余裕に比して、家庭での学習時間が確 保できていない。授業との相関を意識 させながら、課題学習に取り組む環境 を整える必要がある。	【満足度指標(生徒)】 家庭での課題学習が効 果的であると考えてお り、自ら積極的に取り組 んでいる。	家庭での課題学習が、授業での学習の際に効果的であると捉え積極的に取り組んでいる生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、主 管課で原因を分析 し、実施方法を再検 討する。	昨年度 1年 88% 2年 72% 平均 80% (第2回学習実態調査)
③ 土曜補習(セゼミ)を効 果的に実施し、学習に おける基礎基本の定着 を図る。	教務課 各教科	土曜補習については、各年度ごとに改 善や修正を行い、より効果的な実施を 目指している。ただし、効果があると思 っている生徒の割合は目標を下回って いる。各委員会、学年・教科会でより効 果的な方策を追求する。	【満足度指標(生徒)】 土曜補習(セゼミ)は学習 意欲の喚起、基礎学力 の養成に効果があると 考えている。	効果があると考えている生徒の割合が A 80%以上である。 B 65%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。	C、Dが出た場合、主 管課で原因を分析 し、実施方法を再検 討する。	昨年度 1年 57% 2年 54% 平均 55% (第2回学習実態調査)

3 文武不岐の精神のもと、生徒個々の人格の陶冶を目指し、部活動や生徒会活動の活性化を図るとともに、地域や中学校との連携を促す。

①	部活動の内容を充実させ、活性化を図り、文武不岐を目指す。	生徒指導課	1年生は全員部活動に加入しているが、活動に満足している生徒は後半に従って低下傾向にある。その原因を検討するとともに、より満足度を高める工夫が必要である。	【成果指標】 部活動に対する満足度を高める。	満足している生徒の割合が A 75%以上である。 B 60%以上である。 C 40%以上である。 D 40%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度「満足」、「どちらかといえば満足」の割合が88.34%ただし、1年生のみの統計(第2回学習実態調査)
②	運動部の競技力向上を図る。	生徒指導課	体操部や弓道部、放送部が全国大会に出場している。ただし、男子の部活動と団体競技の強化が課題である。	【成果指標】 県高校総体で総合順位25位以内をめざす。	各部の県高校総体の成績が A 2ランク上がった。 B 1ランク上がった。 C 昨年と同等である。 D 昨年より下がった。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	新規
③	部活動が地域や中学校との連携を図り、地域に愛される学校づくりを目指す。	生徒指導課	多くの部活動が地域のボランティア活動や中学校との合同練習を行っている。地域や中学校との交流をさらに活発に行いたい。	【成果指標】 全22の部活動が年1回以上、地域や中学校と連携し、活動を行う。	地域や中学校と連携し、活動を行った部活動が A 20以上である。 B 16以上である。 C 12以上である。 D 8未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度、「実施した」が12部、「実施予定のない」部8部であった。(部活総数昨年より1減)

4 挨拶の励行や交通ルールの遵守などの指導を丁寧に行い、基本的生活習慣の確立と規範意識・マナー意識の高揚を図る。

①	PTAと連携し登校指導や挨拶運動などを通して、挨拶の励行及び正しい制服の着こなしと規範意識、マナー意識の高揚を図る。	生徒指導課 総務課 学年会	交通マナーやJR乗車マナー、服装容儀、挨拶については年々向上している。地域の範となるべく、より高いレベルを目指す。	【満足度指標(保護者)】 生徒の挨拶がしっかり行われていると感じている。	生徒の挨拶がしっかり行われていると感じている保護者が A 90%以上である。 B 75%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度「生徒の挨拶がしっかり行われている」の割合が76%(保護者アンケート)
②	遅刻の管理をし、基本的生活習慣の確立をさらに推し進め、学習環境を充実させる。	生徒指導課 学年会	例年、冬季に遅刻が増加する傾向がある。基本的生活習慣を確立し、落ち着いた雰囲気朝学習を始められるよう指導を徹底したい。	【成果指標】 1日の平均遅刻者数が1人以下になることを目指す。	全体の1日平均の遅刻者数が A 0.5人以下である。 B 1人以下である。 C 3人以下である。 D 3人を超える。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度1日平均 0.9人
③	いじめのない学校づくりをめざし、共通理解に基づいて、全職員がいじめの早期発見・早期解決に向けて連携する。	生徒指導課 保健相談課 学年会	日常的指導に加え、講演会などの取組を進めるとともに、アンケートや生徒との面談を通じて情報収集と指導を図っている。	【努力指標】 課題のある生徒への対応で、学年会や教育相談、生徒指導などが十分に連携している。	連携していると教員の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度「課題のある生徒への対応で、学年会や教育相談、生徒指導等が十分に連携している」の割合が86%(教員アンケート)

5 業務の精選・効率化・平準化に取り組み、生徒と向き合う時間を確保しつつ、時間外勤務時間の縮減に努める。

①	学校全体や担当する分掌において、業務の精選・効率化に取り組む。	全員	個人で担当する業務に関しては、工夫して実行することが比較的容易であった。各課の業務の差配を的確に行い、課全体での取組事項を考える必要がある。	【成果指標】 業務の精選・効率化につながる取組を考え、実行する。	担当する分掌において、具体的な取組を考え、実行した教員の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度「分掌で業務の精選や効率化の取組をしている」と回答した割合が77%(教員アンケート)
				【満足度指標】 学校全体の取組として、業務の精選・効率化が進んでいると感じられる。	学校として多忙化改善のための取組が進んでいると感じている教員の割合が A 90%以上である。 B 75%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度「学校全体として多忙化改善の取組が進んでいると思う」と回答した割合が35%(教員アンケート)
②	部活動運営において、時間を意識した効率的な指導を行う。	部活動顧問	年度後半になるに従い、実践の割合の低下が窺えた。4月時点での計画を年間を通して実行することに、やや困難を感じた部顧問が増えたためと考えられる。	【成果指標】 適切な部活動計画を立て、年間を通じて遂行する。	適切な計画を立て、かつ、おおむね実行できたと考える教員の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度「あてはまる、ややあてはまる」と回答した割合が80%(教員アンケート)